

Title	オンラインによるCLD児童生徒の学習支援の報告
Author(s)	松崎, かおり
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 43-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95471
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

オンラインによる CLD 児童生徒の学習支援の報告

松崎 かおり

1. はじめに

近年のグローバル化に伴って日本でも複数の言語や文化環境で育つ CLD 児童生徒 (Culturally and Linguistically Diverse) が増加しており、CLD 児童生徒のことばの発達を支えるためにさまざまな支援がなされるようになってきた。本稿では、筆者が関わっている「向上塾」での支援活動について報告する。

2. 向上塾について

2.1 「向上塾」誕生の経緯

向上塾は日本とブラジルにつながりを持つ吉田ミシェリ恵子さんによって 2021 年 4 月に設立された、ブラジルにつながりがある CLD 児童生徒支援のためのオンライン形式の塾である。元は保護者からの要望により個別で支援をしていたが、支援希望者の増加と新型コロナウイルス感染拡大の影響により学習の遅れの目立つ CLD 児童生徒らを目の当たりにしたことが事業の立ち上げを後押ししたという。ミシェリさんはブラジルで生まれ、10歳で来日した。学校や地域から支援を受けることも、周りに助けを求めることも難しく、学習の継続に嫌気がさしたという。数年後に地域で日本語教室が開催されていることを知り、少しずつ分からないことを学んでいった。大学・大学院で日本語教育を学び、自身の経験も踏まえブラジルにつながりがある CLD 児童生徒の支援をしたいという思いを持ち、現在もさまざまな形での支援を実施されている。

2.2 「向上塾」の名前の由来

「向上塾」の「向上」は「工場」という言葉から来ている。日本で暮らすブラジルにつながりがある人たちの多くは、ブラジル移民の 2 世、3 世であり、そのうちの大多数は工場などで勤務をしている。「デカセギ」と呼ばれることもある彼らだが、その子どもたちの多くは「自分はデカセギの子であるから将来は「工場」で働くしかない」と、学習の継続を諦めているケースが見られた。これは自ら希望して決めているというより、学齢期に適切な支援

を受けることができず、進路の幅が狭められているという現状もある。次世代の子どもたちには「工場」ではなく「向上」という言葉を広めたいという思いから「向上塾」と名付けられたそうだ。

2.3 講師・生徒について

日本で学ぶ CLD 児童生徒たちの学習を支援するため、向上塾には日本語とポルトガル語を使用するバイリンガル講師が在籍している。講師の背景はさまざまで、ミシェリさんや筆者のように、日本とブラジルに関わりを持って日本で育った人もいれば、成人後に日本語やポルトガル語を第二言語として学習した人もいる。講師らは日本語・ポルトガル語を柔軟に用いて支援している。

向上塾で学習しているブラジルにつながりのある CLD 児童生徒たち (以下、生徒) はブラジル人の両親のもと日本生まれ育っているケース、日系ルーツを持ちブラジルで生まれて来日したケースなど、その背景はさまざまであるが、日本語とポルトガル語を使用したり触れたりする環境にいるという点は共通している。生徒の移動の関係で 1 年の中でも変動はあるが、2024 年 1 月現在では小・中学生が 20 名、大学生 2 名、計 22 名が在籍している。

2.4 支援内容について

同じ学年の生徒でクラスが構成されており、1 クラスに 2～6 名在籍している。支援は各クラス週に 1 度、各回 1 時間実施する。主に教科に関わる学習を取り扱っており、科目は表 1 の通りである。

表 1 児童生徒と支援内容

児童生徒	支援内容 (科目)
小学生	国語、算数
中学生	国語、数学、英語
大学生	小論文、日本語能力試験 (JLPT) の指導

生徒支援の外、ソーシャルネットワークワーキングサービスのライブ配信や投稿機能などを利用し、保護者へ向けて日本の学校や生活、生徒のために家庭ででき

る支援などの情報発信も実施している。

3. 向上塾での支援を通じて

3.1 筆者の担当クラス

筆者は2022年度から向上塾の支援に関わっている。2022年度は小学4年生の算数、中学1年生～3年生の数学と国語のクラスを、今年度は小学6年生の算数、中学1年生の数学、中学1年～3年の国語のクラスを担当している。

3.2 オンライン支援の難しさと可能性

支援開始直後はオンラインでの実施に大変苦労した。まず、生徒の反応の把握が難しい。画面内のみ現れている表情から生徒の理解を測るのは容易ではない。支援中は小さな質問を多く投げかけるようにし、生徒の発言を増やすよう心掛けている。また、生徒らの解答やメモなどはすぐに見ることができない点も困難に感じている。ノートを画面に映して見せてもらったり、写真を撮って送信してもらっているが、カメラやテクニカルな問題もあるし、時間もかかる。算数・数学での図形、漢字の細かい部分など、対面ならばすぐに見て支援をすることができるが、オンラインでは難しい。

一方で、オンラインで実施するからこそそのメリットもある。まず、プリントや動画の共有が容易にできる点である。3Dの立体図形を使用することで、さまざまな図形の展開図や直線や点の位置関係を確認することができる。学習面以外にも、他地域に住んでいる他のブラジルにつながるのがある生徒とともに学べる点も魅力である。現在担当しているクラスにも中部地方・関東地方の生徒が共に学習しているクラスがあり、生徒からも「日本で自分と似た環境で生活している人とオンラインで会えることが楽しい」といった声を聞いている。

3.3 生徒の心の居場所としての機能

支援の時間は学習のサポート以外にも、生徒らが生活や進路などの悩みについて気軽に相談ができる場になっていると感じる。ここでは2つのエピソードを紹介したい。

1つ目は日本人の友達との関係について相談してくれた生徒の話である。ある日、支援が終わってから「カジュアルに友達を遊びに誘うにはどうしたら良いのか」と相談をしてくれた。来日して6年程

度の生徒で、自分は長く日本で生活をしているが、状況や相手によって言葉を使い分けることが難しいと感じている場面が多くあること、そしてそのことをなかなか人に聞くことができなくて悩んでいたということであった。その後何度か、支援後に、生徒が日頃から抱えていた悩みについて話し合う時間を持つようになった。後日、その生徒から友人とうまく関係を築くことができたと報告があり、非常に嬉しく思った。

また、将来の夢について話してくれる生徒もいた。毎回参加はしているが、数ヶ月の間カメラとマイクオフで支援に参加している生徒であった。反応がいまいち掴めず心配しており、「声を出すのが難しい場合はチャットに書いたり、無理のない範囲で反応をくれると嬉しい」、といったことを根気強く伝え続けた。すると、瞬間的にカメラやマイクをオンにして反応をしたり、自分の意見を積極的に伝えてくれたりと自己開示をしてくれるようになった。ある時、過去に学校で経験した辛い出来事によって日本語を話すことに大きな抵抗を持つようになったこと、それでも将来は大学に進学したい思いがあり、努力したいということを教えてくれた。このような出来事から、生徒が日々生活で溜め込んでいる疑問や悩みを相談することができる場としての機能も大きいと考えるようになった。

4. おわりに

2年ほど向上塾の活動に関わっているが、生徒らが「日本語の習得」にとらわれることなく、自分たちがすでに持っているすべてのことばを使った活動をする中で、生き生きと学び、成長をしているのを感じている。これは向上塾では学習支援をするだけではなく、生徒の持つすべてのことば・文化を認め、受け止め、それら全てを生かして一人一人の力を伸ばしていきたいという雰囲気があるためではないかと考えている。今後も続けて子どもたちの持つ複数の言語を柔軟に用いたオンライン支援の可能性を探り、子どもたちの支援に役立つ働きかけを追求していきたい。

【参考URL】

向上塾ウェブサイト「koujō Jyuku」

<https://www.koujo.jyuku.com>

(2024年1月14日最終閲覧)